
研究の経緯と成果・課題

藤尾慎一郎

I 研究の目的

水田稲作の開始によって、採集・狩猟・漁撈の獲得経済から生産経済に移行しはじめた弥生時代は、わが国の歴史や文化を考える上での大きな画期であった。金属器の製作・使用などの技術革新、集団同士の戦争、耕地化によってもたらされた環境破壊、漢王朝や朝鮮半島南部との交流にともなう国際化などは、日本文化のひとつの源流をなすものであった。

ところが、弥生人の生活や生産の拠点となった集落については、十分に明らかにされたとは言い難い状況にある。そこでその数量、地域のかつ时期的な偏差、個々の消長、地域全体の消長、形態・規模・構造、あるいはそこで消費され残された出土品をとおしての生業や手工業のありかた、さらには宗教施設や首長居宅の様相等々を、日本列島における集落遺跡の集成的研究から試行してみようとするものである。そのため、都道府県単位の各地の考古学研究者に協力を求めて、縄文後期ごろから弥生時代全般にかけての集落遺跡を全国的に集成し、一定の基準にもとづいて整理・刊行し、今後の研究に向かって基礎的資料の充実をはかり、もって共同利用に資することを目的とする。

II 研究の経過

【研究組織】

(◎研究代表者)

氏名	所属・専攻	研究分担
石黒立人	愛知県埋蔵文化財センター・考古学	東海地方の弥生集落
扇崎由	岡山市埋蔵文化財センター・考古学 (現岡山市教育委員会)	山陽地方の弥生集落
小澤佳憲	福岡県教育委員会・考古学	九州地方の弥生集落
小林青樹	國學院大學栃木短期大學文学部・考古学	関東地方の弥生集落
柴田昌兎	愛媛県埋蔵文化財調査センター・考古学	四国地方の弥生集落
設楽博己	駒澤大学文学部・考古学	関東地方の弥生集落
濱田竜彦	鳥取県教育委員会・考古学	山陰地方の弥生集落
安英樹	石川県埋蔵文化財センター・考古学	北陸地方の弥生集落
若林邦彦	同志社大学歴史資料館・考古学	近畿地方の弥生集落

西本豊弘	本館研究部・考古学	GIS, 縄文時代の集落
広瀬和雄	本館研究部・考古学	弥生時代の集落
◎藤尾慎一郎	本館研究部・考古学	研究総括
小林謙一	本館研究部・考古学 (現中央大学文学部)	縄文時代の集落
馬場伸一郎	本館研究部・研究機関研究員・考古学 (現岐阜県下呂市教育委員会)	中部地方の弥生集落

【ゲストスピーカー】

山口欧志	中央大学文学部大学院博士後期 (現国際日本文化研究センター機関研究員)	平成17年5月15日
金田章裕	京都大学文学部 (現人間文化研究機構)	平成18年7月15日
森下英治	香川県埋蔵文化財センター	平成18年11月2日
寺前直人	大阪大学構内遺跡調査室	平成19年3月24日
安藤広道	慶應義塾大学文学部	平成19年9月24日
藤田弘夫	慶應義塾大学社会学部	平成19年7月28日
山崎頼人	小郡市埋蔵文化財センター	平成19年10月7日
高尾浩二	鳥取県埋蔵文化財センター	平成19年11月18日

【報告書抄録委員】

氏名	所 属	担当地域
長沼 孝	北海道教育委員会文化課	北海道
阿部明義	北海道教育委員会文化課	北海道
石川 朗	釧路市埋蔵文化財センター	北海道
中村哲也	青森県埋蔵文化財調査センター	青森
永嶋 豊	青森県埋蔵文化財調査センター	青森
武藤祐裕	秋田県埋蔵文化財センター北調査課	秋田
小林圭一	山形県埋蔵文化財センター	山形
金子昭彦	岩手県埋蔵文化財センター	岩手
相原淳一	宮城県教育庁文化財保護課	宮城
福島雅義	(財) 福島県埋蔵文化財センター白河まほろん館	福島
滝沢規朗	(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団	新潟
岡本淳一郎	富山県埋蔵文化財センター	富山
高見哲士	金沢大学大学院文学研究科	石川
陶澤真梨子	金沢大学文学部史学科	石川
赤澤徳明	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター	福井
小玉秀成	小美玉市資料館	茨城
藤田典夫	(財) 栃木県埋蔵文化財センター	栃木
深澤敦仁	(財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団	群馬
渡辺修一	千葉県立中央博物館	千葉

宅間清公	(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団	埼玉
及川良彦	(財) 東京都学習文化財団東京都埋蔵文化財センター	東京
伊丹 徹	神奈川県教育委員会 教育局 生涯学習文化財課	神奈川
中山誠二	山梨県立博物館	山梨
直井雅尚	松本市教育委員会文化財課埋蔵文化財担当	長野 中信・南信
長瀬 出	長野市埋蔵文化財センター	長野 北信・東信
篠原和大	静岡大学人文学部	静岡
鈴木 元	大垣市教育委員会 文化振興課	岐阜
川添和暁	(財) 愛知県埋蔵文化財センター調査課	愛知
石井智大	三重県埋蔵文化財センター	三重
伊庭 功	滋賀県安土城郭調査研究所	滋賀
藤井 整	京都府教育委員会文化財保護課	京都
三好 玄	大阪府教育委員会文化財保護課	大阪北部
杉本厚典	大阪市立海洋博物館なにわの海の時空館	大阪中部
鍋島隆之	太子町教育委員会生涯学習課	大阪南部
池田保信	埋蔵文化財天理教調査団	奈良
豆谷和之	田原本町教育委員会文化財保存課	奈良
仲原知之	(財) 和歌山県文化財センター	和歌山
上田健太郎	兵庫県教育委員会埋蔵文化財事務所	兵庫
荒木幸治	赤穂市教育委員会事務局生涯学習課文化財係	兵庫
中川 寧	鳥根県埋蔵文化財調査センター	鳥取
下高瑞哉	米子市教育委員会文化課	鳥根
河合 忍	岡山県古代吉備文化財センター	岡山
石川岳彦	国立歴史民俗博物館研究員	広島
田畑直彦	山口大学大学情報機構埋蔵文化財資料館	山口
近藤 玲	徳島県埋蔵文化財センター	徳島
森下英治	香川県埋蔵文化財センター資料普及課	香川
白石 聡	今治市教育委員会文化振興課	愛媛
久家隆芳	高知県文化財団埋蔵文化財センター調査課	高知
山崎頼人	小郡市教育委員会教育部文化課	福岡
平尾和久	前原市歴史博物館	福岡
坂元雄紀	福岡県教育庁総務部文化財保護課	福岡
澁谷 格	佐賀県文化財研究資料室	佐賀
戸塚洋輔	西九州道中原事務所	佐賀
中尾篤志	長崎県教育委員会文化財課	長崎
原田範昭	熊本市教育委員会文化財課	熊本
坪根伸也	大分市教育委員会文化財課	大分

甲斐貴充	宮崎県埋蔵文化財センター	宮崎
川口雅之	鹿児島県立埋蔵文化財センター	鹿児島
安座間 充	金武町教育委員会社会教育課町史編纂・文化財係	沖縄

Ⅲ 研究の経過(概要)

本研究は、共同研究員を中心とした集落関連用語の体系化と概念化、各地の拠点集落の忠実な視覚化、復元化作業と、報告書抄録収集委員による全国規模の悉皆調査にもとづくDB作成の二つからなっている。これは縄文後期後半から古墳前期までの集落を中心に、全国規模のDBを作成し、較正年代を使って時期検索をおこなえる、初めてのDBである。

(1) 第1年目(平成17年度)

① 研究会

本年度は3月末までに5回の研究会をおこない、4回を歴博で、1回を愛知・岡山でおこなった。考古用語の体系化と概念化を行うために、関連諸科学の研究者との議論を活発化させる。たとえば地理、民俗、共同体論(文献または社会学)、中世都市論、建築など関連諸分野を考えている。

第1回 2005(平成17)年5月15日:場所 国立歴史民俗博物館

小林謙一「関東地方縄文中期の集落分布研究紹介-GISの利用とセツルメント研究の紹介-」

小林青樹「集落の定義・研究法について-議論の端緒の一つとして-」

山口欧志「GIS研究の実践-弥生から中世まで-」

第2回 2005(平成17)年7月23~24日:場所 国立歴史民俗博物館

小澤佳憲「弥生時代における集団関係」

若林邦彦「集落と弥生地域社会の構造」

第3回 2005(平成17)年9月18~19日:場所 国立歴史民俗博物館

安英樹「いしかわの弥生時代」

濱田竜彦「山陰地方(大山山麓地域)の弥生時代集落遺跡」

藤尾慎一郎・小林謙一「歴博の年代歴史学研究の現状」

第4回 2005(平成17)年11月26~27日:場所 愛知県朝日遺跡,愛知県埋蔵文化財センター

【朝日遺跡見学:愛知県清洲町】

広瀬和雄「都市の起源を探る-新しい弥生時代像の創出と考古学の可能性をめぐって-」

石黒立人「伊勢湾周辺地域における弥生集落の変遷」

第5回 2006(平成18)年1月21日~22日:場所 岡山市埋蔵文化財センター

【筋違遺跡3次調査見学:三重県松阪市嬉野新屋庄町字筋違】

【村竹コノ遺跡・三重県松坂市上川町】

扇崎由「南方遺跡について」

柴田昌晃「高地性集落と山住みの集落」・「瀬戸内海沿岸の大型拠点集落の様相」

② 現地検討会

館外での現地検討会は、日本各地の代表的な当概期の集落遺跡の発掘調査にあわせて、実際に現

地に赴き、一つの遺跡を共同研究員全員で多角的に検討することである。

11月に愛知県朝日遺跡、3月に三重県筋違遺跡と、岡山市デジタルミュージアムでおこなった。

③ 集成作業

弥生集落研究の現状を各研究員に報告していただいたが、集落構造は地域ごとに異なることが現実視されるなか、統一基準で集成作業を行うことはほとんど意味がないという結論に達した。

したがって修正作業は3つのレベルでおこなうのがよいと考えている。1つは報告書抄録の項目レベルの集成を、一気に事務的におこなう。もちろん抄録の掲載が義務づけられる前からおこなう必要があるので、共同研究員を核に、データ収集委員を全国規模で委嘱し、収集することにした。

2つめは、平野など地理的にまとまると考えられる空間内における遺跡群の構造や関係を視覚化することである。第5回研究会の岡山平野の発表でも明らかになったように、遺跡間を有機的に捉えなおすことによって、遺跡構造の消長や具体的な実態を明らかにできると考えられる。共同研究員がおこなう。

3つめは、各地に所在する拠点集落の徹底的な復原、視覚化である。九州北部（比恵・那珂遺跡群）、山陰（妻木晩田）、四国（文京、田村）、近畿（唐古・鍵、瓜生堂）、北陸（八日市地方）、東海（朝日）などが候補として考えられ、共同研究員がおこなう。

④ 1年目の研究成果

共同研究員がこれまで研究してきた弥生集落論について報告した1年であった。集成作業と併行して各地域のなかで遺跡群の構造や関係の視覚化、各地の代表的な弥生集落の復元・視覚化をおこなうことを提言した。

しかし、これらのすべてを限られた時間内で行うことは物理的に難しいことから、次年度には計画を縮小せざるを得ない状況に追い込まれることになる。

(2) 第2年目（平成18年度）

本年度は3月末までに6回の研究会を実施した。歴博で3回、金沢・愛媛・大阪で各1回である。

① 研究会

今年度から今後の縄文・弥生集落論の方向性を探るべく、二つの問題点を設定して取り組み始めた。まず先史時代の集団関係を論じる際にもっとも重要な基礎作業は、一時期にどれくらいの人びとが一つの村で暮らしていたかを特定することである。同時期の集団規模を特定しなければ、人口や労働力、など基礎的な数字が出ないからである。これまでは弥生土器一型式約25～30年の存続幅を一代とみなし、同じ土器型式に属する住居は同時期に存在したと仮定して議論をおこなってきた。ところが、AMS-炭素14年代測定の結果、弥生前～中期を中心に土器一型式の存続幅が150～200年に広がることになった結果、これを同時期とみなすことはとうていできなくなったのである。そこで今後は何をもちいて同時期と仮定して集団規模を推定するか、指針を作らなければならない。そのための基礎作業を、各地の実情にあわせて開始した。

次に、昨年度から課題となっていた考古学的な集落研究の基礎用語を他の学問分野とすりあわせるために関連諸科学の定義との比較検討を始めた。歴史地理学の金田章裕氏をゲストスピーカーに、歴史地理学で用いられる用語との比較検討をおこなった。

第6回 2006(平成18)年5月27日:場所 国立歴史民俗博物館

馬場伸一郎「中部高地の弥生中期集落と手工業生産」

西本豊弘「青森県における縄文時代集落の変遷」

第7回 2006(平成18)年7月15～16日:場所 国立歴史民俗博物館

金田章裕「村落景観史の研究」

小林青樹「弥生人の集落認識－弥生絵画からみた心象風景の復原－」

第8回 2007(平成19)年9月24日:場所 金沢市勤労プラザ

安藤広道「東日本南部以西における弥生時代集落群の動態」

藤尾慎一郎「較正年代を用いた弥生集落論の可能性」

第9回 2007(平成19)年11月2日:場所 愛媛県埋蔵文化財調査センター

小林謙一・藤尾慎一郎「瀬戸内沿岸における弥生転換期の実年代」

森下英治「四国に関する弥生集落論の動向」

第10回 2007(平成19)年3月24日～25日:場所 大阪府立弥生文化博物館

若林邦彦「大阪平野における弥生開始期の遺跡群について」

寺前直人「阪神地域の弥生開始期集落と石器」

② 現地検討会

9月:石川県小松市に所在する八日市地方遺跡を見学した。弥生時代中期前葉から始まる八日市地方遺跡は、この地域の物資の流通拠点と考えられる環壕集落である。今回の調査では杭列を壕に沿って打ち込んだ柵列遺構が見つかるなど、新たな発見があった。

11月:愛媛県松山市に所在する伊予市行道山遺跡(調査された高地性集落)、松山市久米遺跡群(環壕を伴う前末～中初の遺跡群)、松山市樽味四反地遺跡、愛媛大学構内文京遺跡など、高地性集落や平地に所在する拠点集落を見学した。松山平野の拠点集落である文京遺跡と周辺集落である樽味四反地遺跡などの地理的分布を視認できた。

3月:大阪府八尾市に所在する池島・福万寺遺跡の発掘現場を見学した(写真1)。前期から中期にかけての水田が調査中であったが、河内でもっとも古い弥生集落遺跡の一つである。他の地域と違って河内平野の弥生集落は地表下数メートルの深いところに当時の地表面があるので、丘陵上の一般的な弥生集落とは様相を異にしている。また堅穴住居が見つかりにくいので、同時期の集落景観をイメージするのが難しい。当然、弥生集落構造の復元モデルも独自のものとなることを再認識した。

③ 集成作業

研究タイトルにある集成作業は、9月上旬に47都道府県の抄録データを、委嘱した58人の委員全員に送付し、2007年12月をめざして収集作業にはいることができた。現在のところ、総数2～3万件になると予想している。デジタル化できずに、抄録のコピーを送っただけの都府県もあるので、今年度中に補助業務でエクセルに入力しなければならない。

全国58人の委員に委嘱した内容は以下の通りである。

対象(時期, 地域) 縄文後期～古式土師, および併行する時期の琉球と北海道。

抄録の刊行時期 刊行済みのもの, および, 平成19年3月刊行のものまでを下限。

歴博で用意した抄録の過不足をチェックの上、以下の項目を調査する。

時期の詳細 抄録1枚につき土器型式の時期ごとにまとめる。

取り上げる遺跡 近畿以西と東海・北陸以東では集めるデータの範囲が異なる。近畿以西の縄文後・晩期は、遺物しか出てなくても集めるが、弥生以降は遺構が伴うものだけを集める。東海・北陸以東は逆で、縄文時代は遺構が伴うものだけ集めるが、弥生時代は遺物しか出てなくても集める。

遺構・遺物の検出標高。高低差のある場合は低位と高位の標高。

任期 18年9月1日～20年3月末

データの提出 18年度収集分は12月締め。それ以降は19年12月締め。

④ 2年目の研究成果

先述したように較正年代にもとづいて集落論を議論する場合、これまで60年あまりかけて積み上げられてきた弥生集落論は抜本的な見直しが必要となる。一時期、5棟の竪穴住居を一単位とする単位集団、という基本的な考え方の前提は、存続期間が土器1型式の存続期間と同じ約30年であった。しかし較正年代によって一型式が100年を超えると、同時併存という言葉からうけるイメージとはあまりにも乖離したものとなる。100年間、ずっとそこで生活が営まれていたことは、竪穴住居の耐用年数から考えてもあり得ないからである。したがって同時併存というより累積結果と考えた方が理解しやすい。そうした場合、以下の点に留意する必要がある。

100年以上という幅を前提に1時期という議論をおこなうのか、同時併存認定のための方法を徹底的に追求するのは立場が分かれるとは思いますが、後者の方法をとれるのはきわめて恵まれた条件で調査がおこなわれたわずかな事例にすぎないことが予想される。そこで前者の立場にたった場合の集落論に関する基本的な考え方や具体的な解析方法を考えていかなければならない。これは歴博でなければおこない得ないオリジナル性の高いテーマと考えている。

次に、昨年度から課題となっていた考古学的な集落研究の基礎用語を他の学問分野とすりあわせるために関連諸科学の定義との比較検討を始めた。歴史地理学の金田章裕氏をゲストスピーカーに、歴史地理学で用いられる用語との比較検討をおこなった。

全国の委嘱委員による報告書抄録のデータは、平成19年12月が提出期限である。その後、1年かけてデータ整理をおこない、平成21年3月にはデータを完成させて印刷する。DBの構築は20年度から情報委員会にプロジェクト申請をおこない、平成22年度以降のオープンを目指す。

(3) 第3年目（平成19年度）

今年度は1月末までに5回の研究会を実施した。歴博で3回、福岡・山陰で各1回である。

① 研究会

今年度は以下の二つの問題点を設定して取り組み始めた。まず昨年度からおこなってきた考古学的な集落研究の基礎用語を他の学問分野とすりあわせるために関連諸科学の定義との比較検討を継続した。都市社会学の藤田弘夫氏をゲストスピーカーに社会学で用いられる用語との比較検討をおこなった。次に昨年度から取り組み始めた一時期にどれくらいの人びとが一つの村で暮らしていたかを特定する作業であるが、弥生時代には、前期中ごろや後半のように従来考えられていた存続幅を大きく上回る存続期間を示す時期と、前期初頭や前期末のように従来の存続幅とほぼ同じ存続期

間を示す時期があるという藤尾報告を受けて、環境変動と集落規模の関係についてつっこんだ議論が行われた。また炭素14年代では絞りきれない時期細分も、鳥取県大山山麓の集落遺跡では火山灰の入り方を指標に細分していく方法が示されるなど、新たな取り組みがみられた。

第11回 2007(平成19)年5月26日：場所 国立歴史民俗博物館

1月の最終研究会で予定している共同研究員による研究成果公開のための予備発表会を館内メンバーで行った。1月には同じ形式での発表を予定している。

藤尾慎一郎「暦年較正年代時代の弥生集落論2－存続幅か一時点か－」

小林謙一「¹⁴C年代測定を用いた縄文中期集落の動態研究」

馬場伸一郎「石器ブロック分析による縄文晩期末～弥生前半期の居住形態」

第12回 2007(平成19)年7月28～29日：場所 国立歴史民俗博物館

設楽博己・小林青樹「板付I式土器成立における亀が岡系土器の関与」

藤田弘夫「都市とは何か－社会理論から見た最古の都市－」

【国立歴史民俗博物館企画展示「弥生はいつから!？」】

企画展示室にて開催中の「弥生はいつから!？」に展示中の、九州出土の大洞系土器を使った議論(写真2・3)。研究発表①とのコラボ。研究・調査(論文)、展示、研究へという博物館型研究統合の実践をめざした。

第13回 2007(平成19)年10月6～7日：九州歴史資料館

山崎頼人「三国丘陵における弥生時代前半期集落の検討課題」(報告書抄録委員)

小澤佳憲「九州における弥生集団論研究史批判」

第14回 2007(平成19)年11月16～18日：場所 米子市ふれあいの里会議室

濱田竜彦「山陰における弥生集落論の現状と課題」

高尾浩二「東伯耆地域の弥生時代中・後期集落」(現地協力者)

第15回 2008(平成20)年1月19～20日：場所 国立歴史民俗博物館

20年度刊行予定の研究報告特集号執筆予定論文の研究発表

研究発表① 若林邦彦「弥生集落分布のパターンとその変遷」

研究発表② 小澤佳典「北部九州の弥生時代集落と社会」

研究発表③ 設楽博己「独立棟持柱をもつ掘立柱建物の性格」

研究発表④ 小林青樹「弥生集落の祭祀機能と景観形成」

研究発表⑤ 石黒立人「伊勢湾周辺地域における弥生大規模集落の消長と地域社会の変遷」

研究発表⑥ 安英樹「弥生時代の集落にみる北陸地域社会の形成」

研究発表⑦ 濱田竜彦「山陰地方における弥生時代の集落像」

研究発表⑧ 扇崎由「岡山平野における弥生集落の動態」

研究発表⑨ 柴田昌兎「松山平野における弥生社会の展開－弥生集落の動態からみた文京遺跡の成立と解体－」

② 現地検討会

10月に福岡県立明寺遺跡、11月に鳥取県妻木晩田遺跡、鳥根県西谷墳墓群、出雲市出土遠賀川系土器の検討会をおこなった。

③ 集成作業

最終年度ということもあり、平成19年12月までと、平成20年3月までの2回に分けて締め切りを設けたが、東日本を中心に集まりが悪く、平成20年9月末現在、約3分の1が未提出である。

④ 3年目の研究成果

同時併存住居を認定する際、考古学的な詳細な観察をおこなって調査された遺構や、細分された土器型式を用いれば、より有利になることが、濱田の発表の結果、明らかとなった。

IV 研究の内容

(1) 研究会

ここでは、各研究会で報告された研究内容と集成作業についてみていく。

第1年目の2005（平成17）年度は、共同研究員全員がこれまでおこなってきた研究成果のつき合わせをおこなった。5回の研究会のうち、うち2回は、愛知・三重・岡山の遺跡見学をあたった。

第1回研究会においておこなわれた小林謙一報告は、較正年代にもとづいた21世紀の弥生集落論の行方を占うものであった。高精度な発掘に伴って確認された遺構の先後関係にみられる細やかな時期差を、炭素14年代測定によって得られた較正年代で補いながら、同時併存の遺構を認定し、その結果をもとに縄文時代の人口規模、人口増加率、視認関係、交通路など、それまで具体的な追求が難しかった分野へアプローチしたものである。

小林の方法は、きわめて恵まれた研究状況にない限り、誰もが実践できる手法ではないため、縄文研究者の間でも、こうした手法を一般化させて考えない研究者もいるのが現状である。

弥生集落研究においても同様で、今後、較正年代にもとづいた集落論を進める上でも、研究状況の不備が足かせとなることは予想され、本研究の行方にも大きな課題を残すこととなった。

小林青樹も、1970年代以降、おこなわれてきた集落研究の手法や定義では、説明できなくなりつつある現状を、縄文から弥生への転換期を中心に紹介した。

山口欧志は、研究者ごとに持っている弥生集落のイメージを、GISを使って具体化・視覚化する際の幅広い可能性を示した。結果的に本共同研究においてこの方面の研究成果をあげることができなかった。

設楽博己は、南関東における在来系園耕民と進出型水稲農耕民の相互交流を、弥生Ⅲ期の集落を素材に展開した。南関東はⅢ期になってようやく水田稲作が始まる地域である。だが水田稲作を実施しているとはいえ、社会や祭祀面の弥生化は遅れ、特に祭祀面には園耕民以来の特徴を色濃く残す。これは南関東だけではなく、東日本の弥生全般にいえることなので、設楽のいう縄文系弥生文化の実態を、集落からみたことになるのであろう。

第2回研究会における小澤佳憲・若林邦彦の報告は、研究史を否定的に捉え、新しい集落遺跡を用い、分析することによって新しい解釈を加えた集落論であった。

単位集団（墓地も集落も）の認定法（主観的、非科学的）自体が根拠のないものとなるから、上位概念である地域集団や地域統一集団の存在も否定される。小澤が重視するのは、自然地形を利用して居住域として認定できるものや、壕や溝などで人工的に区画された単位である。小澤は区画単

位と呼ぶ。この単位は、共通の祖先を持つ象徴的な関係によって結びついた集団をもとに、経済的な関係が付加されたものである。

同じく単位集団に替わる単位の認定を目的とする若林の「基礎集団」は、河内平野など低地帯の大集落が素材だったため、視覚的な認定が難しく、丘陵上の集落を単位とする集落などを対象とした認定実践が今後、必要となつてこよう。

こうした解釈がはいつた二人の集落論に対して、広瀬和雄は主観のはいらない、ありのままの弥生集落をみていこうと発言。3回目の研究会では広瀬の提言に沿って安英樹と濱田竜彦が北陸と山陰の弥生集落の状況について報告。遺跡の消長、地域に特徴的な遺構、その遺跡の役割など具体的な姿に議論が及んだ。

4回目の研究会で広瀬は、考古学における概念化と体系化という大きな目的を達成する上で、弥生集落研究が果たす役割は何か、という発表をおこなった。経済的・政治的・宗教的なセンター機能をもつもの、またはそれらを担う人びとが住んでいた場所を弥生都市、と定義した経緯の報告もあった。

石黒立人は愛知県朝日遺跡の性格について、狭義の拠点集落とはいえないと指摘し、その根拠として存続期間の短さ、後期になると環壕が消えること、土器の40%が外からの持ち込み、をあげ、近畿の拠点集落とは異なることを強調した。

4回実施した研究会で各研究員の弥生集落に関する報告が終わったが、あまりにも地域による違いが大きすぎて、統一基準によるモデル化や集成は難しいので、個別に走らず、体系化と概念化がもっともふさわしいことを共通認識とすることにした。

5回目の研究会で扇崎由は、近年の調査結果をふまえ、岡山市南方遺跡が沢田遺跡に次いで岡山2番目の環壕集落になることを報告。岡山平野には津島、上伊福、南方という三つの広域遺跡群を認定できるとした。

柴田昌兄は愛媛県松山平野には、祭祀行為の中心である文京遺跡を中核とする環壕を持たない遺跡群があること。瀬戸内における拠点集落と高地性集落の関係について、隔絶されているものと共同体として結合されているタイプの二つに分け、特に後者が瀬戸内航路のランドマークになっているという見通しを示した。

2年目にはいつた第6回研究会で、馬場伸一郎が中部高地における弥生中期後半～後期の集落について報告した。

一回りした結果、各研究員がこれまで調査をおこなってきた地域の弥生集落をまとめることを基本とした研究と、従来の考え方に対してあらたな概念化まで射程に入れた小澤・若林の一連の研究とに二分することができよう。乏しい弥生集落遺跡の中から、何とか社会・経済史的にモデル化を図ろうとした70年代・80年代の集落論に対して、遺跡数の増加を背景に、いえる部分といえない部分がだいぶ明らかになってきたことをふまえて、過去の研究を否定し、新たなモデルを構築するという方向性に間違いはないであろう。ただそれが行きすぎて不毛な議論になっても仕方がない。広瀬の苦言もその辺にあるのかどうか定かではないが、ありのままに遺跡を見つめていこうという発言につながったものと思われる。

7回研究会で歴史地理学の立場から金田章裕が報告した。金田の方法は、現在わたし達が目にし

ている村落景観が、過去のいつの時点のものを反映しているのか、地図や古地図等を使って研究するものである。弥生と中世の集落や村落をどうやってつないでいけばよいのか、具体的な解決策を得ることはできなかった。中世集落を考古学自ら、調査し、距離を縮めるしかないであろう。

小林青樹は、弥生土器に描かれた弥生絵画をもとに、弥生人の集落認識に迫った。特に弥生絵画を用いた集落の立地や範囲に重点を絞ったものである。分析の結果、運河や河川に近いところに村を作り、内側に宅地と生産地をつくっていると報告した。この報告に対して広瀬は、弥生絵画が日常を描いているのか祭祀の場面を描いているのか、そこのところの検証がまず先でないのか、という趣旨の質問をした。

7回目の研究会では発表が一回りすると、共同研究員の関心が三つに分けられることが明らかになってきた。集落自体をありのままに理解しようとする広瀬、方法論の見直しに関心を寄せる小澤、若林、設楽、小林謙一、小林青樹、北陸・東海・山陰・瀬戸内・松山平野など具体的な地域を取り上げて、集落の変遷や地域的特性、集落景観の視覚化を目指した、安、石黒、濱田、扇崎、柴田、馬場である。

しかしこれらの議論を支えている根本はいうまでもなく、遺構の同時併存を保証する一個一個の遺構の時期比定である。較正年代によって土器型式の存続幅が大きく変わろうとしている段階において、これまでのような、すべての土器型式を一世代と同じ2～30年と仮定して、同じ土器型式なら同時併存と見なすという、従来の姿勢に対して、どういう対応をとるのか、まだ一度も議論していなかったので、一回りしたこの時点で、一度考えてみることにした。

その機会は第8回研究会で訪れた。藤尾が較正年代の立場にたった弥生集落論について初めて報告した。炭素14年代測定の急速な普及につれて、各土器型式の存続期間が次第に明らかになってくると、同じ土器型式に属していても、存続期間が百年に達する土器型式の住居については、同時併存とはいえず、累積結果としか判断できない事例が増えることを報告した。

ゲストスピーカーの安藤広道も、現在の弥生集落論には全体論的な視点が欠けていると批判した。神奈川県鶴見川・早渕川流域の中期後半と後期の弥生集落の時間的な動態変遷を検討した結果、中期には台地上の面積という地形上の制約で面積がとれるところに環壕集落が造られていたが、後期になると、水田や耕地をどれだけ確保できるかという点を優先して集落群が形成されているとみる。

愛媛県埋蔵文化財調査センターでおこなった第9回研究会では、香川県の報告書抄録委員である森下章治にゲストスピーカーをお願いし、丸亀平野という地域の集落論に特化した発表をおこなっていただいた。

第10回研究会の若林、ゲストスピーカーの寺前直人の発表は、大阪、神戸地域の弥生前期をとりあげ、長原式と遠賀川系土器を時期差と見る移行説の立場から、秋山の住み分け説や共生説を退け、この地域の弥生文化成立論を展開した。炭素14年代測定の結果からみて長原式と遠賀川系土器は、100～150年ぐらいの共存期間をもつことになるが、若林は長原式を使う人びとが長期間かかって経験を積んでから、遠賀川系土器を使うようになった結果と理解した。古段階までは狭い領域内を移動していたが、中段階以降、定住・継続型の集団になったという。

寺前は、神戸市大開遺跡を資料に、石棒祭祀が環壕の成立とともに消滅したという従来の意見を否定する新しい事実が見つかったとし、若林と同じく、移行説を採る。

以上のように2年目を迎えた研究会では次のような成果を得た。

較正年代にもとづいて集落論を議論する場合、これまで60年あまりかけて積み上げられてきた弥生集落論は抜本的な見直しが必要となる。一時期、5棟の竪穴住居を一単位とする単位集団、という基本的な考え方の前提は、一世代と同じぐらい存続期間をもつと仮定された同じ土器型式が見つかった遺構は、同時に存在したと見なしたことにある。単位集団の存続期間が土器一型式の存続期間と同じ約30年と仮定したところにあるのだ。

しかし較正年代によって一型式が100年を超えるものが存在することがわかると、同時併存という言葉からうけるイメージとはあまりにも乖離したものとなる。100年間、ずっとそこで生活が営まれていたとは、竪穴住居の耐用年数から考えられないからである。したがって同じ土器型式の存続期間の一瞬に、同時併存したというより、土器型式の存続期間の間の累積結果と考えた方が理解しやすい場合もある。その場合、以下の点に留意しなければならない。

100年以上という単位を前提に1時期という議論をおこなうのか、同時併存かどうか認定するための調査を徹底的に進めるのかは、人によって立場が分かれるとは思いますが、後者の方法を取り得るのはきわめて恵まれた条件で調査がおこなわれる場合であり、わずかな事例にすぎないことが予想される。そこで前者の立場にたった場合の集落論に関する基本的な考え方や具体的な解析方法を考えておく必要がある。これは歴博でなければおこない得ないオリジナル性の高いテーマと考えている。この問題は本報告書の藤尾論文で試みている。

また歴博では長原式と遠賀川系土器に付着した炭化物の炭素14年代測定を進めている。神戸市本山遺跡、大阪府木の本遺跡、同若江北遺跡、水走遺跡などの測定から、本山の遠賀川系土器は炭素14年代値が2500¹⁴C BP台を示すのに対して、木の本や若江北遺跡の遠賀川系土器は、2500¹⁴C BP台の測定値はわずかで、基本的に2400¹⁴C BP台であることがわかっている。

これらが時間差を示しているとすれば、各集団が水田稲作を始めるにあたって、受容した年代に差があったことを意味している。長原式と遠賀川系土器との時間的關係について、同時併存と認めて共生説を唱える研究者と、時期差と見て移行説を唱える研究者に分かれている現状も、まもなく決着がつくであろう⁽¹⁾。

3年目（平成19年度）は1月末までに5回の研究会を実施した。歴博で3回、福岡・山陰でそれぞれ1回である。

研究会は以下の二つの問題点を設定して取り組んだ。まず2年目からおこなってきた考古学的な集落研究の基礎用語を他の学問分野とすりあわせるために、関連諸科学の定義との比較検討を継続した。具体的には都市社会学の藤田弘夫をゲストスピーカーに社会学で用いられる用語との比較検討をおこなった。次に昨年度から取り組み始めた一時期にどれくらいの人びとが一つの村で暮らしていたかを特定する作業であるが、弥生時代には、前期中ごろや後半のように従来考えられていた存続幅を大きく上回る存続期間を示す時期と、前期初頭や前期末のように従来の存続幅とほぼ同じ存続期間を示す時期があるという2年目の藤尾報告を受けて、環境変動と集落規模の關係についてつっこんだ議論が行われた。また炭素14年代では絞りきれない時期細分も、鳥取県大山山麓の集落遺跡では火山灰の入り方を指標に細分できる可能性が示されるなど、新たな取り組みがみられた。つまり較正年代にもとづく土器型式の存続幅を意識した、新たな弥生集落論へ、動き始めた年とい

えよう。

以下、平成19年度の研究発表の内容である。歴博研究報告上にまとめる予定の論文について、共同研究員による予備発表会を、まず5月に歴博所属メンバーでおこない、1月に歴博外メンバーがおこなった。

11回目の研究会で藤尾は、昨年度の弥生中期に引き続いて弥生早・前期の場合について較正年代に則って集落論を展開し、福岡県小郡市三沢蓬ヶ浦遺跡を素材に弥生前期中頃から中期初頭までの住居数の変遷を追いかけた。その結果、早期後半や前期末～中期初頭のように、較正曲線が急激に落ちるところでは、一型式の存続幅が一世代単位まで絞り込めるのに対し、2400年問題のところに、前回の中期と同様、100年ぐらいまでしか絞り込めないところの二者が存在することがわかった。したがって土器型式によっては、同時併存の認定が従来のみでも有効なところと、有効でないことが出てくることが明らかになったのである。

小林謙一は、縄文中期加曾利E3式段階に比定された東京都大橋遺跡の解析をおこない、平均13年で住居が建て替えられていることをつきとめた。短時間における集落動態を把握できる恵まれた事例である。また土器型式の存続期間がわかると、土器型式分布圏が広がっていくスピードまでも知ることができることを報告した。阿玉台式の場合は、1年間に約1km、勝坂式では0.3kmであるという。土器型式の存続幅がわかることによって、これまで考古学では難しいとされていた課題への手がかりが得られることを示した発表である。弥生時代の場合は、水田稲作の拡散スピードに応用できる。

馬場は長野に本格的な水田稲作が導入される弥生IV期以前は、住居が10軒程度からなる遺跡、1～2件の遺跡、石器ブロックしか見つからない遺跡などさまざまな様相をみせる遺跡があるが、それらはすべて有機的につながった一連のものであることを報告した。ただ時期区分が弥生前半期といった漠とした括りであったため、細分した時期ごとのモデルを提示した方がよいという意見が大勢を占めた。

12回目の研究会では、集落論とは直接関係はないものの、並行しておこなわれていた歴博企画展「弥生はいつから!？」と共同研究とを有機的に結びつける試みとして、展示場での研究会を実施した。設楽と小林青樹が平成19年5月に発表した論文〔設楽・小林2007〕に使用した資料が展示場に演示されていたので、実際に資料を見ながら、論文の検証をおこなったのである。これまで板付I式土器の成立に関しては、無文土器文化との関係を強く見る見解が多かったが、壺の文様や器形に東北の亀ヶ岡系土器が関与しているという趣旨である。その根拠となった福岡市雀居遺跡や唐津市大江前遺跡出土の大洞系土器を展示ケースから出し、実際に手に取りながら、設楽・小林の説明を聞き、それに対して共同研究員が議論を戦わせるのである。歴博が唱えている博物館型研究統合の実践の一つとして位置づけられる。

藤田弘夫は、都市社会学の立場から都市の概念を7つあげ、そのうちの3～4種が重なって使われることが多いことを報告した。都市は農村の発展形式ではなく、都市として新たに生まれるものであり、都市が生まれることで、農村も生まれること。都市が崩壊することで農村も影響を被ることが力説された。藤田の発表は、農耕が始まり、余剰ができ、支配者が出現したあとで、自然発生的に都市が出現するという、これまでの考え方と真っ向から反対するものだけに、弥生集落論の行

く末にも大きな影響を与えることは明らかである。

13回目の研究会は福岡でおこなった。ゲストスピーカーの山崎頼人は、九州北部の弥生集落論では昔から谷水田の開発による人口増加を説明する場合のモデルケースとして取り上げられてきた、三国丘陵についての最新の調査成果を報告した(写真5)。山崎によれば、生産力の増大による集落論を三国丘陵を舞台に展開することは難しく、採集活動や畑作が卓越した生産基盤をもつ弥生集落という評価の方が、実態に近いという。

小郡地域の開発が始まってから40年たつて示された現状は、予測していた弥生集落像とはかなり異なった発表であった。ただ、三国丘陵の東側に広がる広大な沖積地についての情報が不足しているので、丘陵と平野部を一体として理解すべきではないか、という意見も共同研究員から出された。いずれにしても70年代以来の地域設定にもとづいた集落論はもはや、この地域でも展開できないことが明らかな発表であった。

小澤佳憲は、鏡山猛、高倉洋彰、橋口達也、武末純一という研究者がおこなってきた九州北部を舞台とした一連の集落論は、在来人主体論に立ちながらも、黒川式以来の縄文からの流れを重視していないという点で共通しているとして批判したあと、弥生前期、中期、後期にわたって、九州北部における集落動態の変化をまとめている。それによると、前期に現れる環壕集落は拠点集落ではあるものの母村ではなく、母村からの分村によって成立するものと位置づける。この傾向は中期になっても変わらず、拠点集落は分村によって成立し、前期末から中期初頭にかけて、区画墓を中心に、一端はまとまるものの長続きはせず、中期後半の中国鏡を副葬する王墓の出現によって再編成される。後期になると単位集団間の格差が顕在化してとまらなくなり、拠点集落は顕在化せず、集落内で区画することで劣位集団を作るようになるという。

14回目の研究会は、山陰を舞台に開催した。濱田竜彦は、妻木晩田遺跡の調査を契機に、集落構造や竪穴住居の構造、変遷など、これまで長期的なスパンで考えることが難しかった、山陰の弥生集落に関するイメージが大幅に変わったことを報告した。興味深かったのは、V-3期と呼ばれている土器型式期間内において、廃棄された住居の埋土にみられる黒ボクのはいり方によって、三つに細分される可能性をつきとめたことである。土器型式だけだと一時期6軒の同時併存だったのが、この成果を使うと一時期、1~2軒しか存在しなかったことになる。較正年代から得られている同時併存住居の数も、従来よりも少なかったことが予想されるだけに、今後の研究が楽しみである。

ゲストスピーカーの高尾浩二は鳥取東部における弥生中期後半以降の集落動向について報告し、この時期から集落構造が変化し始めることを指摘した上で、その背景に、鉄器の普及を求めた。

第15回の最終研究会では歴博以外の共同研究員ごとに、最終成果である歴博研究報告に投稿予定の論文の構想発表をおこなった。平成19年5月におこなった館内メンバーの論文名を加えると、研究報告の目次は次のようになる。各報告の改題は、後述する。

研究の経緯と成果・課題-----藤尾慎一郎

論考編1 弥生時代の集落論

集落分布パターンの変遷から読み取る弥生社会-----若林邦彦

独立棟持柱と祖霊祭祀-----設楽博己

弥生集落の祭祀機能と景観形成	小林青樹
¹⁴ C年代測定を用いた縄紋中期竪穴住居の実態の把握	小林謙一
校正年代を用いた弥生集落論	藤尾慎一郎
論考編2 各地の弥生集落	
北部九州の弥生時代集落と社会	小澤佳憲
松山平野における弥生社会の展開	柴田昌児
岡山平野における弥生集落の動態	扇崎 由
山陰地方の弥生集落像	濱田竜彦
山陰の弥生都市－出雲東部地域の非農耕的な大型集落－	広瀬和雄
伊勢湾周辺地域における弥生大規模集落と地域社会	石黒立人
北陸における弥生時代の集落と地域社会の素描	安 英樹
中部高地弥生前半期の居住形態－道具製作・生業・集団規模－	馬場伸一郎

以上のように、平成19年度は次のような成果を得ることができた。平成18年度までは、一型式が百年を超える時期は、それ以上の細分が難しく、同じ土器型式に属する住居の意味は、同時併存ではなく累積の結果で判断しなければならないと考えたが、濱田の発表のように考古学的な証拠をもとに、さらに細分を進めれば、もう少し絞り込んだ議論をできることがわかった。

また前期初頭や前期末のように、従来の存続幅と同じ時期幅と同じ時期も存在するので、土器型式ごとの存続幅の違いの背景にあるものも含めて、実体の伴う集落論を展開していく見通しを得ることができた。

(2) 報告書抄録データベース

① 概要

DBは、主観の入っていないものを機械的に作っていく。そのために報告書抄録を用いることを1年目に確認した。集落構造が地域によってあまりにも異なるため、統一基準で集成を作ることの意味を見いだせないからである。そこで三つのレベルで集成作業、視覚化をおこなうことに決定した。

抄録 列島規模で水田稲作の広がりを、校正年代の尺度でシミュレーション。

58名の抄録委員を決定し依頼する。依頼内容は9項目。

対象(時期, 地域) 縄文後期～古式土師, および併行する時期の琉球と北海道

抄録の刊行時期 刊行済みのもの, および, 平成19年3月刊行のものまでを下限。

歴博で用意した抄録(関東以前)の過不足をチェックの上, 以下の項目を調査する。

時期の詳細 抄録1枚につき土器型式の時期ごとにまとめる。

取り上げる遺跡 近畿以西と東海・北陸以東では集めるデータの範囲が異なる。近畿以西の縄文後・晩期は、遺物しか出てなくても集めるが、弥生以降は遺構が伴うものだけを集める。東海・北陸以東は逆で、縄文時代は遺構が伴うものだけ集めるが、弥生時代は遺物しか出てなくても集める。

遺構・遺物の検出標高。高低差のある場合は低位と高位の標高。

任期 平成18年9月1日～平成20年3月末

データの提出 平成18年度収集分は12月締め。それ以降は平成19年12月締め。

平野など地理的にまとまる空間内における遺構群の構造や関係の視覚化。たとえば岡山平野、松山平野と高地性集落（視認図・鳥瞰図）、大阪平野（河内潟・大阪・東大阪）の空間分析

各地の拠点集落の復元をおこなう。九州（比恵・那珂遺跡群）、山陰（妻木晩田遺跡の植生を含む鳥瞰図）、四国（文京遺跡）、近畿（瓜生堂）、北陸（八日市地方）、東海（朝日：海岸線や埋没地形を縄文から弥生にかけて復元したもの）

1996年ぐらいから発掘調査報告書の巻末に掲載され始めた抄録は、行政上の管理情報が主だが、遺構や遺物、国土座標などの、遺跡DBに不可欠な情報も網羅されているので、有効に利用することにした。

本DBは、較正年代に則って構築し、紀元前百年ごろの遺跡分布は、という検索ができる点にオリジナル性がある。ただし較正年代は土器型式に付加されているので、土器型式ごとに遺構を分けることから始めなければならない。

ところが報告書抄録の時期の欄には縄文時代とか弥生前期までしか書いていない場合がほとんどなので、遺構が属する土器型式の確定をまずおこなう必要がある。そして地図上に表示するために必要な標高情報の付加、国土座標か世界座標かの確定などの作業を抄録委員にお願いすることにしたが、作業量は膨大である。

さらにあがってきたデータ型式を統一したり、較正年代を書き込む作業は、元歴博機関研究員の石川岳彦氏にお願いした。

これらのデータは、平成22（2010）年度から2年計画で歴博DBに登録され運用が開始できるように準備中である。

② 表のデータ項目

遺跡名、いせきよみ、報告書よみ、報告書名、副題、巻次、シリーズ名、シリーズ番号、編著者、編集機関、郵便番号、所在地、電話番号、発行年月日、所在地よみ、所在地、市町村コード、遺跡番号、北緯、東経、調査期間、調査面積、調査原因、遺跡種別、主な時代、主な遺構、主な遺物、特記事項（ここまでは報告書抄録の項目）、相対年代、土器型式、出土遺構・遺物、遺物、較正年代、標高高、標高低、備考、座標の別（ゴチは独自項目）である。このうち説明を要するものについて詳述する（表3）。

座標コード

報告書抄録には遺跡所在地の緯度・経度が示されている。2002年に世界測地系での表示が指導される以前は日本測地系で表されているが、2002年以降は、両者が混在している可能性が高い。両者は7～800メートルずれるという。報告書によっては、日本測地系か世界測地系かが、丁寧に示されているものもあるが、ほとんどが数値だけみてもどちらか判断できない状況にある。本来は1点1点チェックしなければならないのだが、それだけでも膨大な作業になるため、2002年以前のデータは日本測地系と判断して、一括で世界測地系に変換した。またそれ以降の抄録自身にどちらか明示していないものについては世界測地系と判断してデータ化することにして、運用中にデータのおかしいものから修正していくことにした。だいたい3分の1は違っているだろうと予想してい

る。

相対年代

抄録には弥生時代、もしくは弥生前期としか記載されていないので、時期ごとに遺構をまとめることを基本とした。較正年代での検索や解析を目的としているため、土器型式ごとに算出している較正年代を当てはめるには、抄録のデータを土器型式ごとにまとめる必要がある。したがって相対年代も土器型式に当てはめられているものを使うことにした。たとえば板付Ⅱa式なら前期中ごろといった具合に、土器型式が設定されたときの呼称を使っている。

土器編年

共同研究員で相談の上、図1のように決定し、これに併せて記入してもらうことにした。どうしても地元で使っている土器型式名があれば、備考欄に入れたもらうことにし、検索等、統一のおこなう場合は、こちらで決めたものを使うことにした。

較正年代の出し方

本DBが対象とする時期の土器型式に較正年代がついているわけではないし、十分な数の測定数をもって統計処理によって確率の高い年代がわかっている弥生早期や、測定数がわずかなため確率が低い弥生後期など、時期的・地域的にその精度はさまざまだが、土器型式の併行関係を使って表1のように全国の較正年代を仮に決定した。今後は炭素14年代値の増加をふまえて、順次更新していく予定である。

遺構名の統一

GISソフト作成を依頼した同志社大学の津村宏臣氏から、遺構名と遺物名の統一を依頼された。たとえば、竪穴住居なのか、竪穴住居跡なのかといった単純な違いから、方形周溝墓と方形台状墓といった違いに至るまで、検索を容易にするための作業である。時期的に平成21年度より公開予定の文化庁が進めている、『21世紀の埋蔵文化財の手引き』(仮称)において、遺構名の統一が図られるという情報を津村氏から得たので、文化庁の水ノ江和同氏を通じて協力を求め、藤尾が原案を作り、共同研究員でもんだ結果、同一基準による、統一をおこなった。ただし統一したのは今回DBに必要な遺構名だけで、遺物名はおこなっていない。詳細は表2を参照のこと。

標高

同じ土器型式に比定された遺構のうち、最高所にある遺構の標高と、最低所にある遺構の標高を記入してもらった。Z座標に相当する標高は、墓と水田では標高が異なる。列島規模の地図上で展開する場合は問題ないが、松山平野や妻木晩田遺跡のような、地域単位、遺跡単位の視覚化の場合、この高度差が問題になってくるための措置である。

	貝塚文化	中南部九州	北部九州	山陰	瀬戸内南岸	瀬戸内北岸	近畿	東海
後期	神野D	岩崎下層・西和田		中津		中津	中津	林の峰Ⅱ
	神野E	出水		宿毛・福田K2		福田K2	福田K2	林の峰Ⅲ
	伊波	(中原Ⅳ)・小池原下層		布施・(津島岡大)		四ツ池・広瀬土坑40	四ツ池・広瀬土坑40	咲畑Ⅱ
	萩堂・面縄東洞	市来・小池原上層		平城Ⅰ・崎ヶ鼻Ⅰ・津雲A		北白川上層1	北白川上層1	(林の峰Ⅳ)
	大山	鐘崎		平城Ⅱ・崎ヶ鼻Ⅱ・彦崎K1		北白川上層2	北白川上層2	(天子神社)・(下内田)
	嘉徳IA	北久根山		彦崎K2		北白川上層3	北白川上層3	八王子
	嘉徳IB	西平				一乗寺K	一乗寺K	西北出
		太郎迫		元住吉山Ⅰ		元住吉山Ⅰ	元住吉山Ⅰ	鯉塚KⅡ・(長谷)
	室川	三万田		元住吉山Ⅱ		元住吉山Ⅱ	元住吉山Ⅱ	(吉田C)
	面縄西洞	御領		福田K3		宮滝	宮滝	伊川津Ⅰ
	上加世田・大石				滋賀里Ⅰ	滋賀里Ⅰ	津2・寺津下層・清水天王山	
晩期	室川上層・浜坂下層	入佐・古閑		岩田第4類		滋賀里Ⅱ	滋賀里Ⅱ	寺津・清水天王山中層
		黒川古・中				滋賀里Ⅲa	滋賀里Ⅲa	
	喜念Ⅰ	黒川新・上菅生B		舟津原		滋賀里Ⅲb・篠原古・中	滋賀里Ⅲb・篠原古・中	元刈谷・清水天王山上層
	宇佐浜・宇宿上層		谷尻		篠原新	篠原新	稲荷山・桜井	
早期	仲原		山ノ寺・夜白Ⅰ	(板谷Ⅲ)	南方前池	南方前池	滋賀里Ⅳ	西之山
			夜白Ⅱa	(三田谷)	津島岡大	津島岡大	口酒井	口酒井
前期	阿波連浦下層		夜白Ⅱb・板付Ⅰ	古市河原田・古海	I-1	沢田/津島1	船橋	五貫森
			板付Ⅱa	越敷山・I-1	I-2	綾羅木1・津島2	長原・I期(古)	馬見塚
			板付Ⅱb	I-2	I-3	綾羅木2・高尾	長原・I期(中)	樫王
			板付Ⅱc	I-3	Ⅱ前半	綾羅木3・門田	I期(新)	水神平
中期	浜屋原		城ノ越	Ⅱ	Ⅱ後半	門田上層・(百間川米田)	Ⅱ期	朝日・岩滑・丸子
			須玖Ⅰ古			(南方)	Ⅲ期	貝田町古・瓜郷古
			須玖Ⅰ新	Ⅲ	Ⅲ	菰池古(百間川兼基)		貝田町新・瓜郷新・長伏
			須玖Ⅱ古	Ⅳ前半	Ⅳ前半	菰池新(百間川今谷)	Ⅳ期前半	古井・白岩
			須玖Ⅱ新	Ⅳ後半	Ⅳ後半	前山Ⅱ・(百間川兼基)	Ⅳ期後半	高蔵・角江
後期	大当原		高三瀧	V-1	V前半	上東(古)	V期前葉	見晴台
			下大隈古	V-2		上東(中)	V期中葉	山中古・菊川古
			下大隈新	V-3	V後半	上東(新)	V期後葉	山中中・菊川中
終末		西新	Ⅵ	Ⅵ	酒津	庄内	廻間Ⅰ・欠山・菊川新	

水田稲作開始期

図1 土器編年表(縄文後期～古墳初頭併行期)

北陸	中部高地	北関東	南関東	東北部	東北中部	東北部	北海道	推定暦年
前田・三十稲場古		称名寺1		前境・網取1		門前	天祐寺・(余市Ⅰ・Ⅱ)・ところ5	2470
三十稲場中		称名寺2					伊達山・(余市Ⅲ)・(北筒Ⅲ)	
気屋・三十稲場新		堀之内1古		網取2		馬立	タブコブ・(余市Ⅳ・Ⅴ)・(北筒Ⅳ)	
南三十稲場古		堀之内1新						
(気屋Ⅱ)・南三十稲場古		堀之内2				十腰内1a	トリさき・(余市Ⅵ)・(北筒Ⅴ)	
三仏生古		加曾利B1		宝ヶ峯		十腰内1b	入江・船泊下層	
酒見・三仏生中		加曾利B2				十腰内2	うさくまいc	
井口1・三仏新		加曾利B3				十腰内3	(えりもB)	
井口2		曾谷・高井東		金剛寺		十腰内4	堂林	
(中野)		安行1				十腰内5	みつ谷	
八日市新保		安行2				(風張)	湯の里3・御殿山・栗沢	
御経塚・+	(大花)	安行3a		大洞B1			館浦	1250
				大洞B2			札苜B	
中屋古・+	佐野Ⅰa	安行3b・姥山		大洞BC			上ノ国	
中屋新・朝日	佐野Ⅰb	安行3c・前浦Ⅰ		大洞C1			内藤	
下野(古)	佐野Ⅱa	谷地	安行3d・前浦Ⅱ	大洞C2古			聖山Ⅰ	950-840
下野(新)	佐野Ⅱb	+	+	大洞C2新			聖山Ⅱ・Ⅲ	840-780
長竹(古)・鳥屋1	女鳥羽川	千網	杉田・荒海	大洞A1			湯の里Ⅴc	780-750
長竹(新)・鳥屋2a	離山/氷Ⅰ(古)	氷Ⅰ(古)・千網	荒海	大洞A2			(湯の里Ⅴc)	750-600
柴山出村(古)・鳥屋2b・緒立1a	氷Ⅰ(中/新)	氷Ⅰ(中/新)千網	堂山1・荒海	大洞A'			(日ノ浜8号)	600-380
柴山出村(新)・緒立1b・1c	氷Ⅱ・菰谷原・柳坪	沖・注連引原古	堂山2・荒海	御代田	青木畑	砂沢	(尾白内Ⅱ)	380-350
八日市地方3～5	庄ノ原	注連引原新・岩櫃山		宮崎・今和泉	原・山王Ⅲ	五所・二枚橋	二枚橋・(青苗B)	350-320
	緑ヶ丘	中野谷原	平沢	龍門寺	高田B	井沢・宇鉄Ⅱ	恵山1a	320-200
八日市地方6～8・(下谷地)	栗林1/2古/境窪/松節	神保富士塚/池上	(遊ヶ崎)/中里	南御山2	辨形	田舎館2・3	恵山1b・2	200-30
八日市地方9～10・(平田)	栗林2新	神保植松	(池子・大里)/宮ノ台	二ツ釜	(円田)	(大石平)	恵山3	
戸水B	栗林3	竜見町	宮ノ台	桜井	(十三塚)	+	後北B(新)	30-80
(+)				天王山1	天王山1	天王山1	後北C1(古)	
猫橋	吉田	樽1	久が原					80-130
法仏	箱清水1	樽2	弥生町	天王山2	天王山2	天王山2	後北C1(新)	130-200
月影	箱清水2	樽3・石田川	前野町	(男壇・宮東)	+	赤穴	後北C2-D(古)	200-240

表1 土器型式ごとの較正年代

相対年代	沖縄	福岡・佐賀	その他の九州～ 中・四国	近畿	東海・中部	北陸	関東	東北	北海道
晩期初頭	×	BC1250	BC1250	BC1250	BC1250	BC1250	BC1250	BC1250	BC1250
晩期末	×	BC965	BC700	BC650	BC500	BC380	BC200	BC450	BC380
弥生早	×	965-BC780	×	×	×	×	×	×	×
弥生早期	×	965-BC780	×	×	×	×	×	×	×
1期初頭	×	BC780	×	×	×	×	×	×	×
1期中ごろ	×	700-BC500	×	×	×	×	×	×	×
1期古	×	×	700-BC650	650-BC550	×	×	×	×	×
1期古相	×	×	700-BC650	650-BC550	×	×	×	×	×
1期古段階	×	×	700-BC650	650-BC500	×	×	×	×	×
1期中	×	×	650-BC500	650-BC500	×	×	×	×	×
1期中段階	×	×	650-BC500	650-BC500	×	×	×	×	×
1期前半	×	×	700-BC500	700-BC500	×	×	×	×	×
1期後半	×	500-BC380	500-BC380	500-BC380	500-BC380	×	×	×	×
1期新	×	380-BC350	380-BC350	380-BC350	380-BC350	380-BC350	×	450-BC350	×
1期新段階	×	380-BC350	380-BC350	380-BC350	380-BC350	380-BC350	×	380-BC350	×
1新	×	380-BC350	380-BC350	380-BC350	380-BC350	380-BC350	×	380-BC350	×
1期末	×	380-BC350	380-BC350	380-BC350	380-BC350	380-BC350	×	380-BC350	×
1期	×	780-BC350	700-BC350	700-BC350	700-BC350	700-BC350	×	380-BC350	×
2期古	×	350-BC300	350-BC300	350-BC300	350-BC300	350-BC300	×	350-BC300	×
2期初	×	350-BC300	350-BC300	350-BC300	350-BC300	350-BC300	×	350-BC300	×
2期	×	350-BC300	350-BC300	350-BC300	350-BC300	350-BC300	×	350-BC300	×
2期中ごろ	×	350-BC300	350-BC300	350-BC300	350-BC300	350-BC300	×	350-BC300	×
3期古	×	300-BC200	300-BC200	300-BC200	300-BC200	300-BC200	×	300-BC200	×
3期後半	×	200-BC100	200-BC100	200-BC100	200-BC100	200-BC100	×	200-BC100	×
3期新	×	200-BC100	200-BC100	BC200-100	BC200-100	BC200-100	×	200-BC100	×
3期末	×	200-BC100	200-BC100	BC200-100	BC200-100	BC200-100	×	200-BC100	×
3新	×	200-BC100	200-BC100	200-BC100	200-BC100	200-BC100	×	200-BC100	×
3期	×	300-BC100	300-BC100	300-BC100	300-BC100	300-BC100	×	300-BC100	×
4期古	×	100-BC50	100-BC50	100-BC50	100-BC50	100-BC50	100-BC50	100-BC50	×
4期初	×	100-BC50	100-BC50	100-BC50	100-BC50	100-BC50	100-BC50	100-BC50	×
4期前半	×	100-BC50	100-BC50	100-BC50	100-BC50	100-BC50	100-BC50	100-BC50	×
4期末	×	BC50-BC1	BC50-BC1	BC50-BC1	BC50-BC1	BC50-BC1	BC50-BC1	BC50-BC1	×
4期	×	BC100-BC1	BC100-BC1	BC100-BC1	BC100-BC1	BC100-BC1	BC100-BC1	BC100-BC1	×
5期	×	1-200	1-200	1-200	1-200	1-200	1-200	1-200	×
5期初	×	1-100	1-100	1-100	1-100	1-100	1-100	1-100	×
5期初頭	×	1-100	1-100	1-100	1-100	1-100	1-100	1-100	×
5期前	×	1-100	1-100	1-100	1-100	1-100	1-100	1-100	×
5期前半	×	1-100	1-100	1-100	1-100	1-100	1-100	1-100	×
5期中	×	100-100	100-100	100-100	100-100	100-100	100-100	100-100	×
5期中ごろ	×	100-100	100-100	100-100	100-100	100-100	100-100	100-100	×

相対年代	沖縄	福岡・佐賀	その他の九州～ 中・四国	近畿	東海・中部	北陸	関東	東北	北海道
5期後半	×	100-180	100-180	100-180	100-180	100-180	100-180	100-180	×
5期末	×	100-180	100-180	100-180	100-180	100-180	100-180	100-180	×
5期後	×	100-180	100-180	100-180	100-180	100-180	100-180	100-180	×
5後期	×	100-180	100-180	100-180	100-180	100-180	100-180	100-180	×
6期	×	200-240	200-240	200-240	200-240	200-240	200-240	200-240	×
6期前半	×	180-220	180-220	180-220	180-220	180-220	180-220	180-220	×
後期		1-240	1-240	1-240	1-240	1-240	1-240	1-240	×
弥生	×	BC965-240	BC700-240	BC700-240	BC500-240	BC380-240	BC200-240	BC450-240	×
古墳初頭	×	240-400	240-400	240-400	240-400	240-400	240-400	240-400	×
古墳前期	×	240-400	240-400	240-400	240-400	240-400	240-400	240-400	×
古墳時代	×	240-700	240-700	240-700	240-700	240-700	240-700	240-700	×
貝塚時代後期		×	×	×	×	×	×	×	×
縄文時代	×	×	×	×	×	×	×	×	BC380-500

※ BC は紀元前です。×は該当する型式がないことを示す。

表2 遺構名統一一覧表

統一遺構名	報告書抄録に使われている遺構名
竪穴建物 (S I)	住居, 住居?, 住居跡, 弥生住居, 弥生竪穴住居, 竪穴, 竪穴遺構, 竪穴建物, 竪穴住居, 竪穴住居跡, 竪穴住居址, 竪穴式住居, 竪穴式住居跡, 竪穴状プラン, 竪穴状遺構, 竪穴土壇, 円形住居跡, 円形竪穴住居, 円形竪穴状遺構, 方形竪穴住居, 敷石住居, 敷石住居址, 松菊里タイプ
平地建物 (S B)	平地式住居, 平地式建物, 平地建物
掘立柱建物 (S B)	掘立, 掘立建物跡, 掘立柱建物, 掘立柱建物跡, 棟持柱付建物, 家畜小屋, 楼閣, 望楼, 祭殿
建物 (S B)	建物, 建物跡, 布掘建物
不明建物	不明遺構 (住居?)
柱穴 (S P: 建物として認定できるもの)	柱穴群, 柱穴, 柱穴状ピット群
ピット (S P)	小穴 (多数), ピット群, ピット多数, ピットほか, ピット列
土坑 (S K)	落ち込み, 落ち込み遺構 (性格不詳), 大型竪穴, 土坑, 土坑 (貯蔵穴), 土坑 (廃棄坑・貯蔵穴など), 不明土坑, 土壇, 土壇 (貯蔵穴を含む), 土壇跡, 廃棄土壇, 土坑群, 土坑状遺構, 大型土坑 (住居址状) 開口性のある土坑, 集石を伴う土坑, 縄文土坑, 弥生土坑, 不整形竪穴
貯蔵穴 (S K)	ドングリピット, 貯蔵穴, 貯蔵穴遺構, 土壇 (貯蔵穴), 土壇 (主に貯蔵穴), 袋状竪穴, 袋状貯蔵穴, 袋状土坑
溝 (S D)	流路, 流路跡, V字溝, 溝, 溝ほか, 溝多数, 溝跡, 溝状遺構, 並列溝, 大溝, 大溝状遺構, シシ垣, 根切り溝, 水路, 水路群
環壕 (S D)	環壕, 小環壕, 環濠, 環濠?, 二重環濠, 環壕集落, 環濠集落
自然流路 (N R)	濠, 河川, 河川 (埋積浅谷), 旧河川, 自然河川, 河道, 旧河道, 自然河道, 自然流路, 溝 (旧河道), 溝 (旧河川)
旧地形 (N R)	谷状遺構, 谷状おち, 谷状地形, 沼状遺構
屋外炉 (S L)	石囲い炉, 石囲炉, 屋外焼土面, 屋外炉, 集石炉, 土器囲い炉, 灰集中土壇, 炉跡, 複式炉
焼土面 (S L)	焼土, 焼土面, 焼土址, 焼土群, 焼土坑, 炭堆積, 焼土遺構
塀・柵 (S A)	杭群, 杭列, 柵, 柵列
井戸 (S E)	井戸, 井戸跡, 井戸状遺構, 溜井, 土坑 (井戸を含む)

統一遺構名	報告書抄録に使われている遺構名
土壙墓 (S T)	石蓋土壙墓, 土坑墓, 土坑墓群, 土坑 (土器棺墓), 土坑 (土壙墓), 土坑 (墓?), 土壙墓?, 土壙墓跡, 土坑土壙墓, 木蓋土壙墓
周溝墓 (S Z)	円形周溝, 円形周溝墓, 円形周溝遺構, 円形周溝墓遺構, 周溝墓, 前方後方形周溝墓, 方形周溝, 方形周溝遺構, 方形周溝墓, 円形周溝状遺構, 周溝状遺構
墳丘墓	方形台状墓, 四隅突出型墳丘墓, 墳丘墓, 貼石墓 (丹後特有)
周堤墓	周堤状遺構, 周溝遺構, 周堤墓
土器棺墓 (S T)	甕棺, 甕棺墓, 区画墓, 小児棺, 小児甕棺墓, 小児用棺墓, 壺棺墓, 土器棺, 土器棺墓
成人甕棺墓	甕棺, 甕棺墓
石棺墓 (S T)	石棺墓, 箱式石棺, 箱式石棺墓, 配石墓, 墓域 (石棺)
木棺墓 (S T)	木棺, 木棺墓
支石墓 (S T)	支石墓
再葬墓 (S T)	再葬墓
集骨葬	多人数集骨層, 盤状集積
古墳 (S Z)	古墳, 前方後方墳, 墳丘墓, 方墳 (定型化した古墳は非掲載)
墓	墓 (土坑, 石棺・木棺), 墳墓
堰・畦	水田畦畔, 井堰, 井堰状遺構, 堰, しがらみ (堰), 堰状遺構, 堰状矢板列, 導水路状遺構, 畦状遺構, 矢板, 環状矢板杭列, 杭群 (堰), 水口
足跡	足跡群
水場遺構	木組遺構, 木組み遺構, 木杵組遺構, 水場遺構, 水場の遺構, 水制遺構, 導水管, 湧水遺構, 護岸施設・水場の杭, 水さらし場遺構
工房遺構	炉, 排水溝, 土坑, 竪穴
祭祀遺構	銅矛・銅戈埋納遺構, 銅戈埋納遺構, 巴型銅器出土土坑, 祭祀土坑, 祭祀土壙, 祭祀土壙跡, 祭祀遺構

(3) 西日本の集落遺跡見学

① 1年目現地検討会

【朝日遺跡見学：愛知県清洲町】

調査地点 (05Dc) は、貝殻山貝塚の乗る丘陵が北東方向に延びきった地点で、谷を挟んで東墓域と相対している。後期の環壕の南東端から南東方向に延びる墳丘墓群が検出された。6基の墳丘墓が検出され、中には1辺が15mに達する中型の方形墳丘のものがある。主体部は複数検出され、時期は廻間式以降。朝日遺跡の墓域は、後期以降になるとそれまで集中して墓が作られていた東墓域が崩壊し、分散していく時期にあたるため、今回の調査は分散後の姿を示すものとして考えられるという。打製石剣、赤色顔料が塗られた磨石、ガラス小玉象嵌つき壺などが出土している。

【筋違遺跡3次調査見学：三重県松阪市】

弥生前期中段階、馬見塚式と遠賀川系土器が共伴する時期の集落遺跡で、灌漑施設を持つ水田、畝跡、生産地と住居域を画する柵列、住居跡、独立棟持柱建物、木棺墓が検出された。上層は凹線文段階の方形周溝墓群である。弥生前期段階に、これだけの諸施設が見つかった遺跡はほとんどなく、前期の集落構造を知る上で貴重な遺跡である。生産地と住居域を柵列で画し、多角形の住居は初の検出例で、独立棟持柱建物も最古の例になるという。

【村竹コノ遺跡・松坂市】

弥生後期末～古墳前期初頭にかけての環壕集落で、幅 1.5～2 m、深さ 70～80cm の大溝が約 25 m 分確認。内部から、竪穴住居、井戸、独立棟持柱建物などが検出された。環壕集落の途中には橋が架かっていたのではないかと考えられている。

② 2 年目現地検討会
【八日市地方遺跡：石川県小松市】

弥生時代中期前葉から始まる八日市地方遺跡は、この地域の物資の流通拠点と考えられる環壕集落である。平成 18 年度の調査では杭列を壕に沿って打ち込んだ柵列遺構が見つかるなど、新たな発見があった

【愛媛県伊予市行道山遺跡（調査された高地性集落）、松山市久米遺跡群（環濠を伴う前末～中初の遺跡群）、松山市樽味四反地遺跡、愛媛大学構内文京遺跡】

愛媛県松山市に所在するなど、高地性集落や平地に所在する拠点集落を見学した。松山平野の拠点集落である文京遺跡と周辺集落である樽味四反地遺跡などの地理的分布を視認できた。

【池島・福万寺遺跡：大阪府八尾市】

弥生前期から中期にかけての水田跡を見学した（写真 1）。河内でもっとも古い弥生集落遺跡の一つである。前期末から中期初頭にかけての水路が南東から北西方向に向かって数条伸びている状況を見学することができた。条里以前の地形を示す軸線に沿って微高地が伸び、その間を水路が縦横にめぐる。この段階になってようやく水田の水路が定型化し、弥生集落が定着度を高め、継続して生活を営まれるようになることの生産的な裏付けとなる遺跡である。

河内平野では、縄文後期中頃から山麓域を中心に縄文時代の遺跡が出現し、弥生前期になると低地部に本格的な進出をはかることが知られている。土器型式でいうと若江北段階である。平成 18 年度には長原式段階として初めての木棺墓が検出された。円環構造をなす、いわゆる縄文的な墓地構造を持っていた。河内は他の地域と違って地表下数メートルの深いところに弥生時代の地表面が見つかるので、丘陵上の一般的な弥生集落とは様相を異にしている。また竪穴住居が見つかりにくいので、同時期の集落景観をイメージすることも難しい。当然、弥生集落構造の復元モデルも独自のものとなることを再認識した。

③ 3 年目現地検討会
【立明寺遺跡：福岡県筑紫野市】

弥生中期前半・汲田式に属する列埋葬の甕棺墓から、中期後半・須玖Ⅱ式に属する祭祀遺構が見つかった。福岡平野と筑後平野を介する二日市地峡に位置する遺跡だけに、甕棺はいわゆる福岡型にはいる。共同研究員のなかには甕棺墓を初めて見学した者も多く、九州北部における集落と墓域との関係を実際に見ることができた（写真 4）。

【妻木晩田遺跡：鳥取県大山町】

調査中の松尾頭地区の弥生中期後半の住居群や復元住居を見学した。

【矢野遺跡：鳥根県出雲市】

出雲市埋蔵文化財課において、整理中の矢野遺跡や築山遺跡から出土した遠賀川系土器をみせてもらった（写真 6）。流路の下層から見つかった土器は、遠賀川系土器、突帯文系土器、折衷土器など、

表3 縄文・弥生集落遺跡データベース(例)

所収遺跡名	報告書名	副題	シリーズ名	編著者	編集機関	発行年月	市町村コード	北緯	東経
伯玄社遺跡	伯玄社遺跡	福岡県春日氏伯玄町所在遺跡の調査	春日市文化財調査報告書	柳田康雄(編著)ほか	春日市教育委員会	200303	40218	333146	1302733
那珂遺跡群	那珂 36	那珂遺跡群第86次調査報告	福岡市埋蔵文化財調査報告書	長家伸	福岡市教育委員会	200403	40132	370085	1302606
箱崎遺跡	箱崎 17	箱崎遺跡第22次調査報告(1)	福岡市埋蔵文化財調査報告書	榎木義嗣	福岡市教育委員会	200403	40131	W333630	W1302536
箱崎遺跡	箱崎 21	箱崎遺跡第26次調査報告(1)	福岡市埋蔵文化財調査報告書	松浦一之介	福岡市教育委員会	200403	40130	W333628	W1302624
橋本一丁田遺跡	橋本一丁田遺跡 4		福岡市埋蔵文化財調査報告書	池田祐司, 阿部泰之	福岡市教育委員会	200403	40137	333354?	1301907?
原遺跡	原遺跡 11		福岡市埋蔵文化財調査報告書	池田祐司	福岡市教育委員会	200403	40137	333344?	1302024?
比恵遺跡群	比恵 35	比恵遺跡群第79次調査報告	福岡市埋蔵文化財調査報告書	長家伸	福岡市教育委員会	200403	40132	333444?	1302602?

調査面積	調査原因	遺跡種別	主な時代	主な遺構	統一遺構名	相対年代	土器型式	校正年代	標高(m)	標高低(m)
2400	春日町公民館建設	墳墓, 集落	弥生, 古墳	木棺墓, 甕棺墓, 土壇墓, 石蓋土壇墓, 住居跡, 袋状竪穴	甕棺墓 79, 土壇墓 34, 木棺墓	弥生前期中頃	板付 I - 須玖 II 古	BC780-BC50	18	18
					貯蔵穴 7	弥生前期中頃	板付 II a	BC700-BC500	18	18
370	共同住宅建設	集落	弥生	住居 5, 建物 2, 井戸 2	井戸 1, 土坑 1	中期後半 - 後期初頭	須玖 II 式 - 高三瀧式(古)	BC100-AD100	8.2	8
					住居跡 3	後期末 - 古墳初頭	西新町式 - 布留式	200-400	8.2	7.8
2473	区画整理	集落	弥生	土坑 1	土坑 2	後期後半 - 古墳初頭	高三瀧式(新) - 布留式	1-400	3.8	3.4
2100	区画整理	集落, 墓域	古墳	方形周溝墓, 円形周溝墓, 甕棺墓, 掘立柱建物, 方形竪穴, 井戸, 土坑, 溝, 土壇墓, 木棺墓	円形周溝墓 2, 甕棺墓 4	後期末 - 古墳初頭	西新町式 - 布留式	200-400	3.5	2.8
5201	店舗建設	集落, 生産地	縄文, 弥生(前期)	(縄文) くぼみ状土坑 5, 河川 1, (弥生) 土坑 2, 溝 1,	溝, 不明遺構	早期	刻目突帯文	BC965-BC840	4.8	4.5
					河川, 杭列	古墳初頭	布留式	200-240	4.8	4
582	共同住宅建設	集落	弥生	貯蔵穴 2	貯蔵穴 2	中期後半	須玖 II 式	BC100-BC1	5.6	5.4
880	整備工場, 駐車場, ショールーム建設	集落	弥生	住居 1+ a, 井戸 21	住居跡 1, 井戸 1	中期後半	須玖 II 式	BC100-BC1	6	4.8
					井戸 16	後期中葉 - 末	下大隈式(古) - 西新町式	100-240	6	4.8

凡例 項目の内, 説明が必要なもののみ, 掲載した。

- ① 緯度・経度 Wは世界測地系。?は日本か世界か不明なもの。何もついていないのは日本測地系である。
- ② 校正年代 BCがついていないものは紀元後である。
- ③ 橋本一丁田遺跡 4は, 弥生早期と古墳前期の生産関連遺構があるため, 2件のデータをもつ。
- ④ 伯玄社遺跡のように, 墓だけの遺跡も収録している。

西日本各地の弥生開始期の遺跡に一般的な土器相であった。出雲平野の弥生開始期の遺跡だけに、大変貴重な資料であった。

その他【国立歴史民俗博物館企画展示「弥生はいつから!？」】

企画展示室にて開催中の「弥生はいつから!？」に展示中の、九州出土の大洞系土器を使った議論。研究発表①とのコラボ。研究・調査(論文)、展示、研究へという博物館型研究統合の実践をめざした(写真2・3)。

V 研究論文紹介

研究報告に投稿された共同研究員の論文は、目次にも示したように地域にとらわれず、弥生集落全般の問題を取り扱った論文や、縄文集落研究から学ぶべき論文などをまとめた論考編1と、各地の弥生集落を基礎に地域的特性を明らかにしようとした論考編2の二つに分かれている。以下、各論文について簡単に紹介しておこう。

(1) 論考編1 弥生時代の集落論

【集落分布パターンの変遷からみた弥生社会】若林邦彦

近畿の弥生集落分布パターンは、弥生中期には地形条件に左右されていたが、後期になると平準化されていくことで、古墳時代的な集落配置が順次、出来はじめていたとみる。近畿と同じような様相を示す唯一の地域が九州北部である。この二つの地域では多角的な地域社会から古墳時代社会へと移行するが、それ以外の地域は、単数しかない複合型集落がそのまま古墳時代に移行するとした。このように集落分布の類型化と変遷から、列島各地の多様な社会構造や古墳時代社会へのさまざまな移行形態の解明を試みている。

【独立棟持柱建物と祖霊祭祀】設楽博己

議論が西日本に偏りがちであった大型掘立柱建物について、東日本の視点から論考したものである。関東では弥生Ⅲ期になって登場することを指摘したほか、環壕集落と同様、利根川を越えない点など、興味深い事実が示された。かねてより縄文系とされるこの独立棟持柱建物の役割を、大型方形周溝墓と並んで、祖先祭祀の役割を持つものと整理した。

【弥生集落の祭祀機能と景観形成】小林青樹

祭殿を中心とした構図をもつ弥生絵画のなかで、祭殿を切り妻型と独立棟持柱型の二つに分け、前者を大陸系の社稷、後者を縄文系の宗稷と理解して別の機能をもつものとして位置づけ、こうした祭祀体系が前500年ごろ(弥生前期後半)に成立するとした。

【¹⁴C年代測定を利用した縄紋中期堅穴住居の実態の把握】小林謙一

較正年代を使って住居ごとの細かい年代を出し、同時併存住居を確定した集落論の実践例である。縄紋中期の関東を舞台としたものだが、弥生集落論にとっても大いに気になる論考である。東関東に分布の中心をもつ阿玉台式土器と西関東に中心をもつ勝坂式土器が、どのくらいのスピードで分布圏を拡大していくのかを検討したところ、約3倍のスピードで阿玉台式が拡散していることを突き止めた。拡大する速度が異なる背景には漁撈活動を主な生業とする阿玉台式と、植物質食料の採集を主な生業とする勝坂式という、生業の違いがあると解釈した。土器分布圏が広がっていく速度

も較正年代を導入することによってわかることを示した。新たな学問領域の扉を開くことができることを示した論考である。

【較正年代を用いた弥生集落論】藤尾慎一郎

土器型式ごとに較正年代が定まってくると、土器型式ごとに存続期間が異なったり、存続期間が100年以上の長期にわたる土器型式の存在が明らかになってくる。これまでのように一型式30～60年ぐらいと、便宜的に短く考えてきた従来の年代観によって立つ集落論では、もはや対処できなくなる事態が想定される。そうした場合にはどのようにすればよいのか、遺構の同時存在認定法などから、縄文集落論から30年以上遅れて、弥生集落論の今後について考えたものである。

(2) 論考編2 各地の弥生集落

【北部九州の弥生時代集落と社会】小澤佳憲

九州北部の弥生集落を素材に3つの画期を設定し、弥生社会の構造の変遷を新進化主義的社会発展論の立場から位置づけたものである。分析の結果、九州北部では弥生前期～中期の部族社会が、弥生後期には首長制社会へ変遷すると結論づけた。ただ小澤の根拠の一つとなっている福岡市比恵・那珂遺跡群の評価については、調査者の一人である久住猛夫〔久住2008〕の異論もあるため、個々の遺跡・遺構の評価は再検討が必要である。

【松山平野における弥生社会の展開】柴田昌兎

松山市文京遺跡と同久米遺跡群を検討して、松山平野における首長権の形成過程を考察した論考である。弥生中期後葉に出自の異なる複数の集団が集まり、共存して成立した文京遺跡の首長層は、九州北部との交渉によって得た威信財や必需財をもとに、ガラス、金属器生産をおこない、平形銅剣を中心とした共同体祭祀をバックに、東方の瀬戸内社会と交渉・交流する。しかし後期になって文京遺跡が解体すると、首長居館をもつ久米遺跡群が地域共同体として台頭。柴田が「紐帯領域」とよぶこれらの地域共同体が、地域社会の基盤を形成することによって古墳時代の首長墓の造営単位となっていくとした。

【山陰地方の弥生集落像】濱田竜彦

鳥取県大山町に所在する妻木晩田遺跡を対象に、集落変遷、集落像、集団像の復元を目指した論考である。まず妻木晩田遺跡の一般的なイメージの転換を図る。弥生時代の後半期になると、盛行・断絶を繰り返しながら、常に規模や形を変え続けていたことを描き出した。この作業は、濱田による土器の細分作業の結果、可能となったもので、複数の小集団が密に集積して長期的に営まれてきたという妻木晩田像の変更に成功している。終末期前半に一度断絶したあと、終末期後半に、前代と見た目が同じ集落が形成されるものの、質的にはまったく異なったものという見解を示した。

【山陰の弥生都市－出雲東部地域の非農耕的な大型集落－】広瀬和雄

出雲東部に位置する弥生後期末の塩津丘陵遺跡群は、鉄器や碧玉製品を生産し、広域へ供給したほか、他の手工業製品との交換をおこなった一大生産・交易センターだったことが明らかになっている。性格の異なった建物群の計画的な配置、水田稲作に適さない周辺環境、隣接する一大首長墓群は、この地が広域首長層の意志のもとで存立していたことをうかがわせている。したがって本遺跡群は、広瀬の定義による、弥生都市として位置づけることができる。

【伊勢湾周辺地域における弥生大規模集落と地域社会】石黒立人

大規模集落と呼ばれている遺跡のなかには、現れる経緯を異にする三つの類型があることを示し、集住複合型→集住単純型→分散複合型の順に出現するとした。基本となる集団がその時々固有の条件に対応して離散集合すると、三つの類型のどれかになる。生業や手工業生産を可能にするために意識的に集合し、お互いは大小の区画によって明確に整序されている集住複合型が中期Ⅰ～Ⅲ期にまず現れる。Ⅳ期の凹線文段階に外圧によって解体を余儀なくされると、集住単純型という、単純に集住している形に変化する。次のステップへの通過点として位置づけられている。後期になると、1km圏内の中心に環壕集落と非環壕集落が自立的に結合した分散集合型が現れる。このように目的や外圧によって基礎となる集団が離合集散したものが、ある時期には大規模集落として認識されるのである。

【北陸における弥生時代中期・後期の集落】安 英樹

北陸の弥生中期と後期を中心に、集落構造、集落間の関係を明らかにして、北陸の地域社会が形成されていくプロセスを素描した。弥生中期は小松市八日市地方遺跡のような大規模集落の成立、盛行、衰退という、流れのなかで弥生社会が展開していくのに対し、後期になると集落内部に顕在化してくる、象徴的な大型住居のあり方によって、集落間に格差や序列が見えてくるようになる。後期後半から末には、有名な集落が連携して、地域社会が運営されていくことを明らかにした。

本共同研究の成果である弥生集落遺跡DBは、平成22年度公開予定で、DBを使って得られた成果が出るのはさらにその先である。また寄せられた共同研究員の論文も提出されたばかりで、これらをふまえた総合的な検討もおこなっていない。この課題は2009年度中に総合討論会をおこなって明らかにする予定である。

集落論の基本は、同時併存住居の認定から始まる。同じ土器型式に属する土器が、床面から出土した複数の住居群のなかで、ある瞬間に存在した住居が何軒あるかを定めることは、通常、難しいことが明らかになった。したがって、ある土器型式に属する累積住居数から出発する集落論を模索したが、まだ具体的な実践例はない。

これに付随して、同時併存住居の数を出発点にして、より上位の社会構成体を求めていく集団論も、その規模に関しては根拠を失うことを明らかにした。

写真1 池島・福万寺遺跡事務所にて概要説明を受ける
平成18年3月24日

写真2 設楽・小林論文の発表を聞く(歴博)
平成19年7月28日

写真3 展示室にて実際に遺物で確認(歴博)
平成19年7月28日

写真4 立明寺遺跡で甕棺を確認する
平成19年10月6日

写真5 九州歴史資料館での研究会
平成19年10月7日

写真6 出雲市教育委員会で遠賀川系土器を実見
平成19年11月7日

註

(1)——藤尾慎一郎 2009：「弥生開始期の集団関係－古河内潟沿岸の場合－」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第152集 印刷中）。

参考文献

久住猛夫 2008：「福岡平野 比恵・那珂遺跡群」（『弥生時代の考古学』第8巻－集落からよむ弥生社会－，pp.240-263，同成社）。

設楽博己・小林青樹 2007：「板付Ⅰ式土器成立における亀ヶ岡系土器の関与」（『新弥生時代のはじまり』第2巻，pp.66-107，雄山閣出版）。

（国立歴史民俗博物館研究部，共同研究代表者）